

2020年8月9日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「ただ、神の国を」ルカ福音書12章31～32節

主任牧師 加藤 誠

「ただ、神の国を求めよ。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」（ルカによる福音書12章31～32節）

先週に続いて、「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」という年間のテーマ聖句について思い巡らし、聴きたいと思います。

先週は「小さな群れよ」と呼びかけられているのは、「毎日、何を食べようか、何を着ようか」と思い悩んでいる信仰の薄い私たちのことであり、「良い羊飼いである主イエス」の導きがなければ、たちまち道に迷ってしまいバラバラになる私たちのことであること。また「恐れるな」とは、「神の国の働きをわたしと一緒に担っていかないか」という主イエスの励ましの招きであることを聴きました。

さて今朝は「神の国」について思い巡らし考えてみたいと思います。先ほどご一緒に読んだ御言葉で、主イエスが「まず求めなさい」と勧め、父なる神が私たちに喜んで与えてくださるという「神の国」とはいったいどういうものなのでしょう。

福音書を読み直してみると、「神の国」(天の国)は、主イエスが人々に語り伝え、またその行動で示された「福音」(良き知らせ)のことです。「神の国」とは、私たち一人ひとりに注がれている「神の愛」のことであり、神と一緒に歩む時に与えられる「喜び、安らぎや希望」のことです。「神の国」はからし種やパン種のように、ほんのひとつまみ加えるだけで大きく膨らみ、世界を変える力をもっています。また「小さな子ども」は「神の国」に入ることができるのに、「金持ち」が入るのは難しいと主イエスは言われます。なぜなら「神の愛、喜び、安らぎ、希望」は神からのプレゼントであり、「みんなのもの」として分かち合うように与えられているのに、「金持ち(エリート)」はあたかも神の国は「自分だけのもの」であるかのように一人占めしようとするからです。私たちが神からのプレゼントである「神の国」を自分だけで一人占めしようとする時、私たちは「神の国のさいわい」を味わうことができないのです。不思議なことに「神の国」は、みんなと分かち合えば分かち合うほど減るのではなく、分かち合えば分かち合うほど豊かに増えるものであり、その神の国の不思議を体験できるのは、自分の小ささを知り、自分の力だけでは生きていけないことを知っている者たちなのです。

戦後75年目の夏は、新しいウィルスによって、これまでとはまったく違う夏になりました。6月に第一波が収まり、どこかホッとして気が緩んだ私たちの間でウィルスの第二波の感染が急速に広がり、毎日増え続ける感染者数に気を重くしています。昨年、来日したローマ教皇は「無関心のグローバリズムが広がっている」と指摘し、「むなしいシャボン玉の中に閉じこもり、はかない夢を見ながら、他者へ

の関心を失った利己主義が急速に世界に広がっている危うさ」を語っていました。実際、教皇の言葉どおり、コロナによってそれぞれの国の利己主義がむき出しになっているように思うわけですが、そのような私たちに、ローマ教皇はこう語りかけます。「それに抗しうるのは分かち合い、祝い合い、交わる私たちしかない」と。

先月、ルワンダの佐々木和之さんから届いたレポートに励まされました。ルワンダでもコロナウィルスの感染防止のためロックダウンという強硬措置が取られ、不要不急の外出をすると道端で警官に拘束される厳しい状況が約二ヶ月続いたそうです。そのロックダウンは貧しい人たちの生活を直撃しました。佐々木さん夫妻が支援している「ニヤンザの光」という女性たちの自助グループの一人で、夫が虐殺加害者として刑務所にいる女性は、農場で働いて得る金銭収入の道を絶たれてしまいました。子どもたちの食糧も底をついて途方にくれ、絶望の涙に暮れたそうです。しかし「ニヤンザの光」の女性たちは苦難を分かち合い、もっているものを分かち合うことによって、その苦境を生き延びました。グループの世話役が電話で連絡を取り合い、携帯電話が不通の仲間の家には、警察に拘束されないよう裏道を通って行き、支え合ったのでした。「わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを…」という使徒パウロの言葉を引用しながら佐々木さんはこう語ります。「長丁場になる今回の危機的状況を生き抜くためには、練達とまではいかないまでも、お互いにどのように分かち合うことを続けていけるか。この苦境にあって私たちが今をどのように生きているのかによって、コロナ後の社会のあり方がずいぶん変わったものになるのではないかと」。

佐々木さんの言葉に沿うなら、私たちが今回のコロナ禍をただ悪いものが通り過ぎるのを息をひそめてやり過ごすようではなく、また自分だけが良ければ…と無関心に引きこもるのでもなく、このような時だから知恵を出し合って、それぞれ「神さまからいただいた賜物」を「分かち合い、届け合い、つながり合う」ことを考えていくとき、その新しいつながり方が、「アフターコロナ」、コロナを経験した新しい社会や教会をつくっていくことになるのではないのでしょうか。

主イエスが「ただ神の国を求めよ」と言われる時、「食べ物や着るものなどは必要ない」と言われているわけではありません。主は、私たちに必要な食べ物や着るものをご存知です。けれども、私たちが神からのプレゼントを「自分だけのもの」にして握りしめるのではなく、「みんなで分かち合う」ことを祈り求めていく、生き方の方向転換にこそ、「神の国のさいわい」があることを教え励ましてくださっているのです。戦後75年目の夏、あの戦争をなぜ食い止めることができなかつたのか、今の私たちの中にもうごめいている悪と愚かさを心に刻み、私たち自身の小ささを覚えながら、今それぞれが自分にできることを差し出し合う、アフターコロナの新しい生き方を祈り求めていきたいのです。